

立松和平

天地の夢

天地の夢

立松和平

天地の夢

初出誌 「すばる」

昭和六一年一月号〜六二年三月号

一九八七年 五月一〇日 第一刷発行

定価 一、四〇〇円

著者 立松和平

装丁 田村義也

発行者 堀内末男

発行所 鶴集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

郵便番号 一〇一

出版部 (〇三)二三八一二八四二

電話 販売部 (〇三)二三〇一六一七一

製作課 (〇三)二三八一二九六四

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

天地の夢

序 章

風もないのに杉の葉が震えていた。露に覆われて白くなった葉が微かに動いたが、そこから霧が湧いた。霧は葉の間から幹に沿ってゆっくりと降っていき、朽葉の重なった地面に触れるや弾むように浮いて、斜面を這い昇っていった。鬱蒼たる杉木立の下で、もう数百年も陽光というものを浴びていない地面だった。光は汚水のようにぼんやりとひろがってくるだけ、生きものはここに千年立っている杉木立のほかは、朽葉の下で蠢いている虫だけである。山の呼吸のように霧はゆっくりと斜面を昇っていき、純白の部厚い雲の層をつくって動かなくなつた。そうしたままで何時間もがたつた。何日、いや何年かもわからなかつた。霧の粒子はたがいに触れあつて大きく重くなり、やがて沈みはじめた。杉の梢のあたりに溜まつていた霧も重々しく澱み、もつと上空の蒸気は雨粒となつて降りそそいだ。水は朽葉から腐葉土に染みていく。そこは暗くて暖かな世界だった。土中を染みながらも水はふくらんで重量を増し、速度を増して下降していく。狭くて窮屈な場所から解き放たれ、水滴となつてしたたつた。澄んだ音が次々と土の空洞に響き渡つた。暗黒の底に川が流れているのだ。水は雑り気がなく、生きものも一切棲息しない。静謐な川だった。細い水の筋同士が合さり、それがまた幾つかよじれあつて、しだいに太く豊かな流れになつていった。ある筋は地中深くに沈んでいき、あるいは湧き水となつてゆるやかに地表に染みだし、あるいは間歇泉^{かんけつせん}となつて瘡^{かさ}のように噴出した。途中の経過

はどうあれ、水は下へ下へと流れていった。

山は決して静かではなかった。僅かでも風が吹くと、枝は打ち鳴り、葉は騒いだ。風のいくところ、祭囃子でもあるように賑やかになった。雨森伊平は風に乗り、笛太鼓の音を聞いていた。こしばらく、伊平は光の一切差込まない闇の底にうずくまっていたのだった。心は平穩に満たされていた。杉の葉の先からしたたる一滴の中に伊平はいるのだ。伊平は水を吸った飽和状態の朽葉をこすって過ぎ、土中にしばらくとどまってから地下水になり、跳上がって再び土に染みた。暖かくて居心地のよい場所だった。暖まるにつれ伊平は染み上がり、蒸気となってふわりと浮かんた。そこは陽光の差したまばゆい草原だ。ふわり、ふわりと漂った。しみひとつない透明な蒼穹から、木の葉一枚、草一本から、ひっそりと棲息している鳥獣虫魚が一匹一匹鮮明に眺められた。見えるものすべてが伊平には限りなくいいのだ。草木は騒ぎ、鳥や獣や虫は鳴き、魚は跳ねて、歓喜を歌っていた。山では伊平はすべての生きものたちと同じようにあるがままにあった。風雨に運ばれて何処にでもいくのだった。

陽の当たるテラスのような草原に群れ鹿がいた。鹿はよもぎを食べているのだ。首を振るたびに薄茶色の背中が光った。伊平は上空から数えはじめ、三十まできたところで鹿の群は一斉に首を突き上げた。敵が迫ってきたのではなくただの風の軋みだとわかった鹿は、それぞれに胸を揺さぶる動作をし、身体も角も大きく立派な親鹿を先頭にして小走りに草原を横切っていた。鹿は一列になり、親鹿がつけた足跡の上を規則正しく踏んでいくのだ。伊平は鹿たちの呼吸をすぐ耳元でのように聞いていた。鹿の群が灌木の中に見えなくなろうとする間際、伊平はふと好奇心を覚えて一気に下降した。いかにも俊敏そうな若鹿の背中に乗った。若鹿は一瞬立止まって耳をぴんと立て、前に間隔ができすぎたことに気づいてあわてて後を追った。足の運びが小気味よかった。倒れかかって斜めになった木をくぐり、朽木を跳んで、暗い森を一気に抜けた。水が岩を噛むのが聞こえた。前を駆ける鹿の白っぽい尻の毛が見えては隠れた。鹿の群は岩から岩へと跳んで崖を降りているのだった。弾んではしな

る筋肉が毛皮の上からでもわかった。岩だらけの河原に着くや、若鹿は深く大きく息をついた。岩の間から塩泉が湧いていたのだ。親鹿は窪みに溜まった水を、若鹿たちは流れでて砂に吸い込まれようとする水を啜った。喉を通った塩水は身体中に染みていく。

命のあるものは身体が命じるままにしか動けない。伊平は鹿の背中から降り、水飛沫が煙のように上がる溪流の上に浮かんだ。水は渦巻き、ぶつかりあって、ごおごおと鳴っていた。水中に黒い影がいきなり走り、水面を割って銀色の身体を躍らせた。飛んでいた熊蜂を岩魚が捕食したのだ。腹の内側を熊蜂に刺された岩魚は、水中でもがき苦しんでいたが、下流の淵に白い腹を上に向けてぶつかりと浮かんだ。岩魚は自分の力では動かなくなり、木の葉のように回転しながら流れ去っていった。熊蜂も静かになっていた。

伊平は同じところにとどまっていた。岩と岩の間に汚水のような薄闇が溜まっていき、やがてすっかり暮れた。空は再び白んでくる。同じことが数限りなくくりかえされ、水の量は眼に見えて減ったり増えたりした。灰色の雲が峰々を包んだ。最初は霧雨だった。やがて雨は指の太さほどになり、雲と地面とを短い距離で結んだ。山が鳴りだした。泥が山を削り、川に流れ込んだ。岩魚は腹に砂を呑み淵の底に沈んでじっと堪えていた。山鳴りは一層激しくなり、あちこちで崖が崩れた。川底では岩が転がっていた。泥や根こそぎの樹木を呑んだ鉄砲水が、大岩をゴムマリのように弾ませながら、溪流を轟然と下っていった。水は岩の崖にぶつかって跳ね返り、その勢いで反対側の崖に激突し、そのたび山を鳴らすほどの音をたてた。

こんな時に命のあるものたちはどうやって耐えているのだろうか。伊平は思い出していた。あれは伊平が小さな女の子だった時だ。川の辺に湧く山の温泉に、病をわずらった母親と湯治にきていた。岩をくりぬいた湯舟に杉皮葺きの簡単な屋根が掛けられ、宿の湯治客も通りがかりの旅の人も、老若男女が勝手気儘にやってきた。湯に火照ると、身体を水に漬けた。大人に囲まれてぬるぬるする肌を

押しつけあつていなければならぬ湯よりも、伊平は浅瀬のほうが好きだった。浅瀬には眼をこらすと小魚がいたし、石を裏返すと川虫が貼りついていていた。伊平は母親に呼ばれるまで裸のまま河原にいた。突然母親が湯舟から立上がり、両腕をひろげて悲鳴を上げた。伊平は母親のほうに向かつていった。裸足の足裏が痛いので思うように走れない。湯舟からあわてて山の斜面に逃げていく大人たちの尻が見えた。母親一人だけが湯舟に立っていた。母親の視線を追って伊平が肩越しに振り向くと、大人の背丈よりも高い茶色の水がすぐ背後に立上がつっていた。伊平は水と岩ともみくしやになり、間もなく泥水の中からふわりと浮かんだ。母親も一緒だった。行き場もなく山中を漂ううちに、母親とはわかれた。

あの幼い日々との間にどれほどの時間が横たわっているか、伊平には見当もつかなかった。この山系だけでも川筋は無数にある。どんな小さな谷の底にも水は必ず染みだしていた。水のまわりには生命が集まってくる。伊平は何かというとき水に触れていた。水辺で伊平は透明なものたちをたびたび見かけた。互いに声を交わすこともなく、草の露や、暗く湿った石の裏や、朽木のうろに溜まったぼうぶらの湧く汚水や、獣の眼の中に宿ったものたちと、静かに交叉した。薄青い光り玉になって草葉の根元にうずくまっていたり、梢にひっかかってぼうつと輝いていたりしているものたちもいた。下界のものとしての生命をなくした一時期を休息しているのだ。雨や風がどんなに荒れ騒ごうと、肉体がなければ平穏だった。自己がなければ葛藤もない。疲労も倦怠も苦痛もない。

束の間のうちに嵐は去った。泥色の水は徐々に引いていった。水流が澄んでくると、すっかり様相の変わった河原が露わになった。転げまわった岩も落着き、小さな岩を覆うほどにたまった泥の層の中に、根こそぎにされた流木が点在していた。水ぶくれになった猪が腹を上にして岩に引っ掛かっていた。陽が照って河原は焼け、雨に打たれた。猪は毛が脱げ落ちて白っぽくなった。虫の棲家になっていたのだ。猪の肉がなくなる前に虫は蛹になって羽化していった。慣れ親しんだ空に飛び立っている

く虫たちは、短時間の生と死とを際限もなくくりかえしているのだった。再び小さな嵐があり、泥は少しづつ流されていった。白い石の原になった河原が陽を照り返しはじめると、一帯には鳥獣虫魚の濃い気配が甦ってきた。

あれは何時のことだったのだろう。伊平がこうして河原にとどまっていると、きのこ採りの山籠を負った若い女がやってきたことがあった。悪戯心を起こした伊平は、女の菅笠と髪との間にもぐったのだ。やがて女は山の斜面をよじ登りはじめた。密生した灌木の中を、幹にしがみつぎ、蔦をたぐつて、山の奥へ奥へとはいっていったのだ。女は菅笠を脱いで小脇に抱えた。息が忙しくなり、顔も身体も汗に濡れた。そのうち灌木の繁り方が疎らになって松林にでた。女だけが知っている松茸のしろだった。若嫁の女は、足腰のめつきり弱った姑からこのしろを教えられたのだ。伊平はしばらく前に姑に連れられたこの女の姿を見かけていた。姑は、とうに死んだ姑に、その姑もまた先代の姑にと、女たちの間で代々受け継がれてきたしろだった。女は麓の里からまだ暗いうちに発ってくるのである。背後を気にし時々立止まって耳をそばだてる女の姿を見て、伊平は理解した。女の腹にはまだ木の芽ほどの小さな赤ん坊がいたが、身体を乱暴に使って松林の奥へと進む姿からして女はそのことを知らないのだ。女は山籠を負ったまま四つんばいで斜面を這いまわった。しろが荒らされていたのである。松茸を食べた形跡もないところは、どうやら猿の仕業らしい。女は気を取り直すと、散らばった松茸を集めはじめた。伊平が悪戯心を起こしたのはその時だ。女は立上がつて歩きはじめた。松林を抜けると、もう道は失われていた。女は大またで歩いていった。道なのか道でないのか、土から岩が突き出していた。土も岩も深緑の苔に覆われている。女はそこで一度転び、山籠の中の鎌と松茸とを散乱させた。それを拾おうともせず、膝についた泥を払おうともせずに、女は進んだ。朽葉が散り敷かれた斜面や、木の間の明るみや、行く手を遮る大岩や、周囲を威圧する巨木の幹が、以前に見たことがあるような気がした。遠い記憶と符合する風景が連続し、先へ先へと呼び寄せられて、一層道を失う

のだ。女には自覚がないが、女はかつて山に棲んでいた。死ねば再び山に帰るのだから、遠い記憶があるのは当然である。日が暮れて足元が見えなくなると、女は地面に身体を横たえた。恐怖と疲労と空腹と寒さで震えていた。嘔り泣く声を、伊平は聞いた。ホーイ、ホーイと呼ぶ声が風にまじって聞こえた。反対方向からも聞こえる。猿が呼びあっているのだ。人の声かと勘違いをした女は立上がり、こっちだよー、こっちだよー、と叫んだ。女の声は樹間の闇に吸われて残響もなく消えた。同時に猿の声もびたりとやんだ。女はいつまでも呼びつづけ、暗く深い穴に吸い込まれるような気分に陥ってからもしばらくそこに立っていた。やがて女は膝を抱え丸く小さくなって眠った。明るくなっても、眠っているのか醒めているのかわからなかった。朦朧とした気分のまま歩きだした。目の前の風景が記憶と符合するのではなく、遙かな記憶の中にはいつてしまったのだ。女は恐怖も疲労も通り越して山を歩いていて。岩の崖をよじ登った。峰を越えればまた山があり、棘だらけの灌木をくぐり抜け、胸までつかって溪流を渡り、何度目かの崖を登ってから放心した。何日たったのかわからなかった。ガーン、ガーンと鉄鍋や釜を打つ騒がしい音に醒めると、伊平はいつしか女になっていたのだ。谷の底に人の頭が動くのが見えた。戻ってこいやあ。あっちにいつちやあなんねえぞお。そこから動くなやあ。列になった人々は口々に叫んでいた。女は崖の途中の棚になったところにいた。伊平が動こうとしない限り、女は指一本動かさないのだった。上半身はすっかりはだけ、着物が帯のところにかろうじて引っ掛かっていた。肩も腕も胸も血だらけで、傷口が化膿していた。なんまんだぶ。なんまんだぶ。神様仏様、おらの嫁をどうかあつちに連れていかねえでおくんなんしょ。夫らしい若い男が口の中に念仏を唱えながら岩をよじ登ってきた。男は女のところにくと、まず手ぬぐいで目隠しをした。それから女の衣を整えた。そうしている間にも男たちが次々と登ってきて、女を夫の背中に荒縄でくくりつけた。崖を降りる途中で女は悲鳴を上げて少し暴れた。夫は全身で岩にしがみついて堪え、女が静まると、またそろそろと注意深く降りていった。伊平は崖の棚のところにとどまり、遠

ざかつていく女の頭を見送っていた。

伊平は崖から跳んで綿帽子のように空中に浮かんた。あの女のことを思い出しているうちに、知らず識らずのうちに崖に登っていたのだった。崖の棚に草が生えては死んで腐葉土がたまり、そこに岩檜葉が根を張っていた。峰も谷も岩も樹も陽光を浴びて光っていた。伊平はふわりふわりと漂いながら、この自分などからは窺い知れない巨大な力が山には籠っているのを感じたのだ。さあもうそろそろ出かけるようにとの声が山から発せられる気がした。それを待っていた。

その声は未だに届かない。何かわからない力に急立てられるようにして伊平は走りはじめた。まず谷底に一気に落下し、ガレ場の岩に触れる直前で水平移動にうつった。じきにガレ場には傾斜がついてきた。伊平は人の背丈の高さを保ってガレ場を溯っていき、転がった岩がなくなると、今度は櫟の山腹を登って尾根にでた。そこから山頂に向かって全速力で飛んだ。光になって消滅しそうになる頃に山頂に至り、そのままの勢いを殺さずに尾根を下って次の峰にとりついた。渦巻き状に山に昇っては下ることをくりかえした。何もわからない。山を支配している大いなるものの意志は伊平にはどうしても掴むことはできないのだった。

伊平は木のまたのところに止まって休んだ。いつしか伊平は玉になって淡い燐光を放っていた。雨が降ってやんだ。風が吹いた。伊平は岩屋の寝巢にもぐって心細い夜を数えきれないほど送った頃を思い出していた。あれは自分が猿だった時のことだ。暗くなると眼が見えなくなるので、黄昏には寝巢に戻らなくてはと気が急いだ。雨の降り込まない岩屋にじっとうずくまって空が白むのを待つのだ。冬は群で固まりあって眠った。群の体温がひとつになると柔らかく眠りに誘われるのだったが、外側にいると半身を寒さにさらさねばならなかった。外側の猿はたえず内側にはいろうとして強引に割り込み、別の猿が押し出される。するとその猿はキャッキャッと悲しそうに鳴く。寒さの厳しい晩は押しあいのためまんじりともできないことがあった。山から栗や木通が姿を消すと、木通の蔓をむいて

食べた。山が雪に覆われてしまえば、熊笹を食べるしかなかった。噛んでも噛んでも味はなく、いくら食べても腹はふくれなかった。南向きの雪の少ない斜面にいれば、朽葉を掘って檜や樺の落果を拾うことができた。それも食べつくしてしまうと、河原に降りて石を裏返しにして苔と虫を嘗めた。それさえもなくなり、岩の崖に登って岩檜葉を食べているうちに、水辺から雪が溶けてくるのだ。土や小石を掘れば沢蟹がいる。凍ったように動きが鈍い赤い蟹を掘ったそばから貪り食う。冬を越してきた掌はあかぎれで血が滲んでいるのだ。雪がなくなった土から真つ先にでてくるのは藪のとうだ。淡い緑色の少し苦い芽にもさすがに飽きてくる頃には、河原あざみや山うどの根が掘れる。山は手を伸ばせば何かに触れるほどに食料があふれている。一番うまいのは山藨の幼虫だ。それと、野苺、熊苺。

明日は雨なので、今日のうちに山葡萄で腹一杯にしておかねばならなかった。ギャアギャアと鳴きながら、手当たりしだいに山葡萄を頬ばった。噛む暇がないので、頬の袋にたたいれるだけである。高い唐松の梢にいた物見猿が、キャアキャアと鋭く鳴いた。大騒ぎしていた猿の群は水を打ったように静まりかえり、幹に跳びついて枝から枝へと逃げた。元気の盛りの若猿の伊平は、もう一房だけ山葡萄を食べようとしたのだ。その時白いものが躍りかかってきた。犬だ。咄嗟に伊平は枝に跳びついて樹上に逃げたものの、犬に激しく吠えかかられて身体がすくんでしまった。ガアクガアクと物見猿が呼ぶのだが、枝から枝へと跳び移ることもできず、伊平は樹の上へ逃がれるだけで精一杯だった。物見猿はひとしきり枝を揺すぶっていたが、間もなく静かになった。犬の聲が恐ろしくて伊平は樹の途中で動けなくなった。その時だ、息を切らして猟師がやってきたのは。伊平は葉の繁みに身体をひそめたものの、恐怖が堪えきれないほどにつのつてきて、自分の眼を両手で覆った。伊平は熱いものが身体の中を通過した感覚を覚えていた。片腕で両眼を覆い、片手で枝にすがった。そうしたまままで事切れたのだ。枝と枝との中空に浮かび、伊平は揺れている自分の身体を見た。胸から流れた

血が腹と脚を通って爪先からしたり落ちた。血は土にしみて草の根のようにひろがっていった。樹を登ってきた獵師が、鉈で枝を幹のところから落とした。上を向いたまま下にのけぞっていく自分の顔を伊平は見た。顔は土色から紫色になっていた。足首を鳶で縛られ棒で逆様に吊られて運ばれていく自分の後を、伊平は里が見えるところまで追っていったのだった。

何度も猿だった。河原で山椒魚を腹一杯食べたのも猿の時だ。母親の背中につかまって川を渡っていた。母親が片腕で支えてくれていたのだが、体重がなくなつて浮き上がり、川流れになったこともあった。銀色の水面が眼の上にいつたり下にきたりして、ついに上にいつたままになった。

ぼんやりとした記憶が破片になつて散らばっていた。伊平は働き盛りの男だった。用足しを終えて黄昏の山道を急いでいると、道傍に山犬が犬つくばいをしていた。立止まると襲いかかつてくるように恐ろしく、そのまま過ぎていった。余程歩いてから振り返ると、つづら折りの山道を山犬が見え隠れについてくるではないか。立止まると山犬も立止まり、歩きだすと歩きだし、つねに一定の間隔をとっている。逃げたり転んだりしたとたんに跳びかかつてくるのだと聞いたことがある。一步ごとに身体が冷たい汗に濡れてくるのがわかった。家までの道は遠く、途中に一軒の人家もない。すっかり暮れて、月光が何もかもを濡らすように降りそそいでいる。今の伊平にはすべてが夢なのだ。山犬の眼になると、背中を丸めた急ぎ足の男の後姿があった。伊平は山犬だったこともある。行っても行っても行き止まりということがない好奇心のために、男を追って脚が身体を運んでいくのだ。道が曲がりくねっていて、男の背中は木の葉の間に見え隠れした。足音で男が歩いていることがわかった。青白く光る道の先に闇の固まりのような小屋があった。板の隙間から明かりが洩れていた。男が悲鳴のような声で二声三声叫んだ。勢いが余つて男は雨戸をはずしてしまったのだった。家の中に月でもあるように黄色い光がひろがってきた。伊平は踵を返して逃げた。自分の影が拡大されて山に映っていた。

いつか白い衣を着た神人の行列を山の上から眺めたことがあった。前後を甲冑の武士に護られた行列は、玉纏たままとり、護法の太刀、金幣を捧持して黙々と山を越えていった。あれは日光東照宮御神体が会津へと御動座していったのだ。それから何日かして、おびただしい数の兵と牛馬とがやってきた。大雨が降り、大軍が通って道はいよいよぬかるんだ。山砲を引き弾薬や兵糧を負っていく兵たちは難渋していた。夜半になり、疲労困憊した兵たちは樹蔭に寄り、枯葉を焚いて暖をとった。小さな火があちらこちらで闇を染めていた。峻険な山の中で闇入者の群は見るからに疲弊していたが、焚火がまるでひかりだまのように燃えさかって、伊平や山に漂うものたちは浮かれ立ったのだった。枯葉は露に湿っていたので煙が霧のようにでた。石を枕として眠っていた兵は、明るくなって目覚めてから、見渡すかぎりの山々が躑躅つづみの白に覆われていることに気づいた。一本一本の樹が繁茂して四方に垂れ、雪の結晶のように花々が咲き乱れていたのだ。露臥していた兵たちはゆっくりと身を起こし、再び行軍を開始した。その数日後に山砲が轟き銃声がしたが、ここからは遠かった。この山中だったのかも知れないが、伊平は近寄っていかなかったのである。

あれから百回近くの四季が巡った。幾つもの生死をくりかえしたが、前後の脈絡は失われていた。風に誘われ、樹木の背後に潜む気配に誘われ、せせらぎに誘われて、間もなく動きだそうとしていることを伊平は意識した。中空に浮かび、気のむいた方向に漂い流れていくだけだ。伊平はゆっくりと山を降りはじめた。

明けるか明けないかの霧の杉林だ。あわあわとした霧の中から人間ならば三人もいなければ抱えられないほどの杉の幹がでてきた。千年杉は霧の中から生まれて霧の中に死んでいくようだ。伊平は思い思いにたてている杉木立の呼吸音を聞き、千年生きた杉が倒れる時のことをぼんやり考えた。千年も一瞬にすぎない。杉の吐く瘴気のような息を吸って生きていたことがあった。あの時は何を望んでいたのだろうか。伊平はいま鮮明に思い出した。長い時間をかけて黒々とすった墨を、毛筆にたっぷ

りと吸わせた。眼の前には雨のしみだらけの白い粉を浮きだした板壁があった。息を整えてから、伊平は渾身の力で太刀を振り抜くようにして一気に筆を走らせたのだった。

悲風蕭々として天日を覆い、陰気鬱々として山河に漲る。

鳥は啼かず、獸は吠えず。

誰か天を仰ぎて慟哭せざらん。誰か地に伏して号泣せざらん。

現下の悲局招来は、神を冒瀆し、祭りを蹂躪せるに基因せずんばあらず。これ、ひとり神州をいうのみならず、世界の暗澹もまたその因を同じゅうす。昭和民草の罪科ここに極むというべし。

心耳を傾けて神声を聴け。心眼を開いて神兆を見よ。

人意によっては既に絶望というべき深淵に沈湎したる今日の危局を、直ちに挽回すべき神霊の恩頼を蒙り得ば、本懐の成就にして幸甚の極みなり。

現身の命消ゆるは、わが大いなる至福歎喜とならんことを。

昭和二十年八月十六日

雨森伊平拝

あの時の激情は何だったのだろうか。伊平は開魂神社の板壁に遺書をしたためると、神殿の外にて腹をかつさばいた。刀身に晒木綿を巻いて切先を腹に突き立てたのだが、横にさばこうにも刀はそれきり動かなかった。血があふれてて身体が痺れた。鼓動とともに激痛が寄せ、喉の奥から呻き声が洩れてきた。自分の声ではないみたいだった。開魂神社の神木となった鬱蒼たる杉木立に歌うような呻き声は吸われていった。麻痺して痛みもなくなり、生と死の境界にあつて、伊平は天と地と両方をまたいでいるような不思議な充足を覚えていた。捨てようとした命がこの身からなかなか離れず、振

り切ろう振り切ろうとして五年間もたった。薄明の中で生きていたその年月、伊平は森羅万象と交感しては涙してきたのだった。天地が揺れて流れていることは眼の端で見ているだけでわかり、山里の座敷に端座しているだけでも、震える空気を頬に感じることができたのだ。瘦せさらばえたこの身は障子を締め切った奥座敷に置いておこうとも、魂は夢見るようにして山中を彷徨^{さまよ}っていたのだ。

森羅万象が騒ぎ立つ濃密な気配に包まれた奥座敷で、世俗的な野心にあふれている義弟の雨森福徳と対座している時も、伊平は苦痛を表面にださないほどに清澄な心境を保っていることができた。福徳は部厚い唇で臆面もなく妄念を語りつづけた。満州武装開拓団に志願した伊平の長男健郎のことである。文武両道に秀でた利発な雨森健郎は、敗戦によって修羅地獄となった満州で生き延びることができた、と福徳はいった。ソ連軍に武装解除されてシベリヤに抑留され、収容所^{ラゲリ}で政治教育を受けた。ナホトカから舞鶴港に着いた引揚船で、精強な革命軍兵士雨森健郎は日本に上陸したのである。革命軍は東京を制圧し、下の町にやってきた。この山にはいつてくるのも時間の問題である。日本農民魂を植えつけると称して農家の次男三男に思想教育をし、武装開拓団として満州に送りだした私塾開魂社塾長雨森伊平は、長男健郎の指揮する革命軍に捕えられ、人民裁判を受けるのだ。

現身のこの命が消えるなどなほどのことであろうか。すでにこの世に執着はなく、この瘦軀を捨てるよい機会だった。霧のような淡い闇がたまっている障子を締め切った部屋で、伊平は静かに端座して日本刀を見ていた。柄から切先まで何百回となく視線を這わせて精神の統一をはかった。蟬の聲が読経のように聞こえた。伊平は立上がると、まず障子を袈裟懸に切ったのだ。棧が残って倒れない障子を蹴った。部屋に流れ込んでくるしたたる緑に向かつて裸足で駆けだし、当たるを幸いに植木を切りまくったのだ。空は濁りもない透明な青だ。百日紅^{さきすけ}の幹を打って刀身が折れ、部屋に戻って新しい刀を取ってきた。それから伊平は母家と長屋門の間の芝生で素振りをした。福徳が外から